

学校ケースメソッドによる学校問題解決

How to Solve Difficult Problems by School Case Method

安藤輝次*

井上英樹**

Terutsugu Ando*

Hideki Inoue**

奈良教育大学教職大学院* 姫路市立南大津小学校**

School of Professional Development in Education, Nara University of Education*
Minami-Ohtu Elementary School**

〈あらまし〉 本稿は、平成19年11月の実践である安藤・和田共著「ケースを通して悩みを交流し、解決する」のその後の南大津小学校における学校問題解決の進め方を綴ったものです。同校の教員で話し合った結果、12月には、総合的な学習について全学的に取り組む必要性があると認識し、全教職員に問題を共有してもらい、問題解決に取り組むようになる方途として3月以来取り組んできた“学校ケースメソッド”を用いることとしました。安藤の指導助言を受けながらも、ケースづくりも全体討論の進行役も教員が行うものです。その結果、明らかになったのは「カリキュラム」についての考えの甘さを実感し、総合的な学習のねらいや目標を全学的に吟味し、全学的なカリキュラム開発に繋げることができるようになりました。

〈キーワード〉 学校ケースメソッド 教員研修 学校カリキュラム 総合的な学習

1. 学校全体で取り組む問題を絞り込む

平成19年11月の研修後、上村富男校長先生と学校ケースメソッド導入にかかわる教員の間で話し合った結果、総合的な学習の学校カリキュラムづくりが本校では遅れており、そのケースを使って、全教員に問題提起をすれば、年度内に何とか大枠ができるのではないかという結論にいたり、ケースライターの和田教諭とも相談しながら、2008年1月7日、私（井上英樹）からケースの原案（キーワードと設問を含む）を作成し、それを安藤先生にメールで送って修正加筆を求めました。

1週間後、安藤先生からケースの修正版とともに、『福井市社西小学校研究紀要』をお送りします。付箋で記した箇所は必ず読んで、その中から井上先生が21日の研修会で皆さんに予備知識として読んでおいて欲しいエッセンスの頁（あるいは切り貼りでもけっこう。負担を考えれば、10頁以内でしょう）を増し刷りして、全教員に1月19日（金）までに配布し、それを讀んだうえで、【設問1】から【設問3】までに答えるように指示して下さい」という指導助言のメールが届きました。

後で聞いた話では、私を含め本校では、“カリキュラム”という考え方が十分理解できていないので、

参考文献も添えたということでした。このように、私の場合、やや文献紹介を含めた指導が入った点が、前年9月に情報教育が得意な三木教諭が行った情報モラルのケースメソッドとの大きな違いです。

今回の「学びが質的に高まらない総合的な学習」と題する学校ケースメソッドの研修会では、指導目標とキーワードと設問までは用意して全体討論の進行役として臨みましたが、正直言って教育内容まで十分理解できていたわけではありません。以下に、このケースのためのティーチング・ノートに掲載しますが、教育内容については、研修会後にかなり修正加筆を加えています。なお、このティーチング・ノートもその様式が確定する前の試行段階で作成したものであり、その後、安藤先生は他の研修会で何度かこのケースを使って、ほぼ一般的に使えるティーチング・ノートができたということです。

2. 「学びが質的に高まらない総合的な学習」の

ティーチング・ノート

1) ケースの要約

総合的な学習は学年に任されていて、内容が偏っていたり、重複したりしている問題があった。そこ

で、学校全体の総合的な学習担当の吉田先生は、年度初めに内容や領域の重なりを調整するとともに、中間発表会を取り入れた年間カリキュラムの作成を各学年に依頼しました。そして、夏休みの教員研修でできあがったカリキュラムを持ち寄り、重なり等を再調整しながら、本年度の総合的な学習の年間カリキュラムをつくりましたが、総合的な学習における子どもの学びの質が高まらないという新たな課題が明らかになってきました。

吉田先生は、総合的な学習の実態把握のために全教員にアンケートを行い、その結果、学びの質が高まらない原因が、子どもの発達に応じて育てるべき力を高めていくカリキュラムになっていないことがわかりました。そのようなとき、校長先生から、優れた総合的な学習を実践している小学校の資料を手渡され、これをヒントにして、縦軸に“育てたい力”、横軸に“学年”を設け、学年ごとに身につけさせたい力を示した年間指導計画をつくることを思いつきました。しかし、先進校の実践を本校でそのまま実践するのもむずかしい。どこから手をつけていけばよいのか。具体的な手だてもつかめないまま、吉田先生は来年度、どのような総合的な学習のカリキュラムをつくれればよいのか悩んでいます。

2) 研修の目標とキーワード

まず本校の総合的な学習の学びに足りなかったものは何なのかを話し合っていくことです。この話し合いを通して、日ごろの指導の中に、子どもたちに対して「育てたい力」や「学び方を学ばせる」という意識が薄かったことを反省し、テーマや身につけさせたい力を発達段階に応じて具体的に表した年間指導計画をつくることが必要なことに気づかせたいものです。

さらに、総合的な学習の年間指導計画で得た新たな視点をヒントに、実際に学習を進めていくうえでの具体的な教師のかかわり方について話し合い、子どもたちにつけたい力を身につけていくための指導のあり方を考えることをねらいとしています。その際の設問とキーワードは、次のとおりです。

【設問1】本校の課題である「自分の考えをまとめて伝える力」「自分の力で課題を解決する力」を、子どもの発達に応じて身につけさせるためには、どのような年間指導計画をつくれればよいだろうか。

【設問2】子どもにとって切実な課題をもたせるために、どのようなことに留意していかなければならないだろうか。

【設問3】中間発表会において子どもの学びの質を高めるためには、教師はどのような点を配慮して進めていくべきであろうか。

キーワード：

総合的な学習、環境教育、中間発表会、最終発表会、相互評価、発達段階、学習アイテム、考えをまとめ、伝える力、課題を解決する力、系統性、学び方、年間指導計画

3) 指導上の留意点

事前にケースと3つの設問を印刷したプリントと、図1のような先進校の総合的な学習のカリキュラムなどの関係資料を配布し、設問に対する答えを書くように指示して下さい。研修開始時に、ケースの問題に関する概要を押さえて、グループごとに話し合い(20分間)に入り、その後、全体討論を行います。そこでは、次のような点に留意して下さい。

- (a)グループ構成の際には、総合的な学習担当や研修担当等、ある程度総合的な学習について知っている人をグループに1名は配置する。
- (b)全体討論では、活発に意見が出るよう、各設問の初めには後に意見がつけやすい発言をしてくれると思われる人を指名する。
- (c)同僚教員の発言に傾聴するよう心がけ、できるかぎり内容を引き出そうと努める。
- (d)設問ごと、あるいは、各設問の関連がわかるよう板書を工夫し、年間指導計画との関連を意識づける。

3. 全体討論の展開と参加者の感想

【設問1】本校の課題である「自分の考えをまとめて伝える力」「自分の力で課題を解決する力」を、子どもの発達に応じて身につけさせるためには、どのような年間指導計画をつくれればよいのでしょうか。

- (ア)「自分の考えをまとめて伝える力」は情報処理能力と考えられる。国語の学習指導要領のねらいと関連があるのではないかと。
- (イ)育てたい力とそれを具体化した系統的な評価規準表をつくる必要がある。
- (ウ)本校のテーマは「地域を生かしたもの」と決まりつつあるが、その学習で、どのような子どもに育てたいのかという根本になる部分がないために、末端のことを一生懸命調べて発表して終わるような、深まりを感じられない総合になっている。育てたい力を、低・中・高学年でしっかり考えていく必要がある。

『学びあい活動』で育てたい力

育てたい力		低学年	中学年	高学年
追 究 す る 力	○課題を見つける力	・身近なことがらに関心を持ち、自分なりの気付きを持つ。	・自分を取り巻くことがらに関心を持ち、課題を見つける。	・さまざまなことがらに関心を持ち、課題を見つける。
	○計画を立てる力	・したいことを見つけ、活動の計画を立てる。	・解決へのおおまかな見通しを持ち、計画を立てる。	・解決への見通しを持ち、構想や計画を立てる。
表 現 す る 力	○問題を解決する力	・自分の思いを生かし、自分なりの方法で進んで活動する。	・さまざまな方法で情報を収集・選択し、より良い方法で主体的に解決する。	・多様な情報を収集・選択し、適切な方法で主体的に解決する。
	○学びを振り返る力	・活動したことの喜びを感じ、次にやりたいことを見つける。	・自分の考えや方法を振り返って成長に気付き、新たな課題を見つける。	・自己の学びを見つめ学びの価値づけをしたり、自分の成長に気付いたりして新たな課題を見つける。
共 に 学 ぶ 力	○自分の思いや考えを表す力	・気付いたことや楽しかったことなどを、自分らしい方法で表す。	・考えたり調べたりしたことを、いろいろな方法を工夫して表す。	・考えたり調べたりしたことを、目的に応じて効果的に表す。
	○他へ働きかける力	・気付いたことを相手にはっきりと伝える。	・学んだことを、相手によく分かるように発信する。	・学んだことをもとに、方法や相手を考えて発信する。
共 に 学 ぶ 力	○自分の考えをつくり出す力	・自分の思いや願いをはっきりと持つ。	・より良い方向をめざして、自分の考えを持つ。	・より価値ある方向を考えて、自らの意志を決定する。
	○他の考えから学ぶ力	・友達の良さに気付き、認めたりまねたりする。	・自分を取り巻く人々の良さに気付き、それを自分の学びに取り入れる。	・さまざまな人の良さを見つけ、それを自分の学びに積極的に取り入れて、考えを深める。
	○互いに高め合う力	・友達と助け合ったり教え合ったりして仲良く活動する。	・友達の意見や考えを大切にしたりして練り合う中で、互いの考えを深め合う。	・活動の中で、互いの良さを生かし合い高め合う。

〈福井市立社西小学校『総合的な学習の時間』研究開発実践報告書、2001年〉

- (エ) 子どもの学習のさきを予想できるような事前の研修・研究を行うことで、子どもに合った支援が行うことができ、適切な課題をもたせることにもなる。
- (カ) 表現力とまとめる力を身につけさせるために、中学年は模造紙、高学年はパソコンを使うと決めて、体験させていけばよい。
- (キ) 低学年「ふれる」、中学年「つくる」、高学年「生きる」というようなテーマを設定する。
- (ク) 6年生の総合的な学習のテーマの根底には、すべて「生きる」ということがつながっている。そのテーマを前面に出して取り組ませていけばよいのではないか。

以上のような話し合いを通して、縦軸に育てたい力を具体的に表し、横軸に子どもの発達や興味関心をもとにしたテーマを表した系統的な年間指導計画をつくらなければならないという気持ちが高まってきたように思います。そこで、育てたい力の具体化に話を進めるために、次のような【補足発問1】を投げかけると、(ア)から(オ)のような意見が出ました。

【補足発問1】本校の課題である「自分の考えをまとめて伝える力」「自分の力で課題を解決する力」を、子どもの発達に応じて身につけさせるためには、どのような年間指導計画をつくれればよいでしょうか。

- (ア) 表現力には、「まとめる力」と「伝える力」がある。伝える力には「他に働きかける力」がある。
- (イ) いまは、自分が調べたことをそのまま写して伝えているだけなので、内容を理解して自分の言葉で、自分の思いを伝えられるようにすることが必要である。
- (ウ) 情報活用能力を使った表現力も関係してくる。
- (エ) 「自分の力で課題を解決する力」とは、課題を設定して、課題に対していろいろな手だてを使って情報を収集し、収集してきた情報を整理しながら理解し、理解したことから自分なりの新しい考え方を生み出す。
- (オ) 国語などの学習指導要領の中に、各学年の発達段階に応じた身につけさせたい力のヒントとなるものが多くある。情報処理能力の発達段階に応じた系統表もあるので、それを参考にしていけばよい。さらに、【補充発問2】を投げかけて、本校の実態や取り組みを踏まえて、学年で取り組ませたいテーマについて尋ねたところ、粹下のような発言がありました。

【補充発問2】低・中・高あるいは各学年で取り組ませたい大きなテーマについてはどうでしょうか？

- (ア) 中学年では校区や自分自身にかかわるようなことが大切である。
- (イ) 低学年では「体験する」「見る」「さわる」「やってみる」を重ねることである。
- (ウ) 低学年では「ふれる」の部分で「まち・人・自然にふれる」とか「まち・人・自然と遊ぶ」が考えられる。まとめると『ふれる』ということが大切である。
- (エ) 中学年では、『つくる・かかわる』がよい。
- (オ) 高学年は「地域の中で生きている」「自分の生き方を考える」「共に生きる」という内容から考えると『生きる』になるのではないか。

【設問1】や【補助発問2】を通して、総合的な学習の全体の柱を『地域に学ぶ』とし、学年テーマを低学年『ふれる』、中学年『つくる・かかわる』、高学年『生きる』とする方向性を確認しました。さらに、先生方が思っている「育てたい力」を出し合うことで、これからの学習や支援のあり方の具体的なイメージも見えてきました。そして、それらを整理し本校の総合的な学習における学びを確かなものにするために、今回のケースメソッドでの話し合いをもとにして、今後、年間指導計画を作成していくことになりました。

【設問2】子どもにとって切実な課題をもたせるために、どのようなことに留意していかなければならないでしょうか。

- (ア) いろいろな体験を通して、その中に込められた問題に気づかせるような機会をつくる。
- (イ) 課題を決めるとき、教師が一方的に決めるのではなく、子どもとの話し合いやウェブマップなどを使って子どもと一緒につくっていく。
- (ウ) 子どもにとって身近なものや具体的なものから問題を見つけさせる。また、子どもが興味関心を抱くインパクトのある導入を考える。
- (エ) 低学年、中学年、高学年のスパンで考えたとき、低学年は教師が筋道を立ててあげて、高学年では自分の力でできるようにしたい。
- (オ) 教師が課題解決に向けた筋道をもっていき、教師側がある程度仕組んでいく必要があるのではないか。
- (カ) 学年の課題が子どもの実態や願いに合ったものであるかどうかということが、子どもがその後の学習で切実な問題を持ち、意欲的に取り組むために重要である。特に初めて総合的な学習と出会う中学年ぐらいになると、体験を重視し、体験や実際のかかわりから生まれた問題に取り組んでいくようになる。
- (キ) 課題をどのように提示し、導入するかということ

が重要です。例えば、教科学習を生かした発展である、いろいろな人の話を聞く、DVDを見る、体験するなど、導入を工夫することがすごく大切になる。

(ク)クラスの中にいろいろな子がいる中で、一人一人の子どもの学びに対して、どこでつまづいているのか、どんな支援を必要としているのかなどの実態をしっかり見きわめて、その子どもにあった言葉かけやかかわりを行う中で、一人一人が継続して問題意識をもって学習を進められるのではないかな。

このように【設問2】をめぐる全体討論では、次のような共通理解を見いだすことができたように思います。

- ①インパクトのある導入によって、子どもの興味関心を沸き起こす。
- ②体験を重視し、体験から問題をつくっていく。
- ③十分な教師の題材研究により、子どもへの適切なアドバイスができ、子どもが切実な問題をもてるのではないかな。
- ④一人一人の子どもの実態を十分に把握し、その子に合った支援を行うことが、一人一人の問題意識を持続、発展させるために大切になってくる。

【設問3】中間発表会において子どもの学びの質を高めるためには、教師はどのような点を配慮して進めていくべきでしょうか。

- (ア)高学年に発表会を見てもらうことで、客観的なアドバイスがもらえるのではないかな。他学年との交流ということも視野に入れを考えてみてはどうだろうか。
- (イ)中間発表会において、学んだ内容や表現の技法を評価し合う視点やねらいを、子どもたちにしっかりもたせて取り組むことが必要になってくる。
- (ウ)発表形態にも工夫があればよい。例えば、今日は1組が発表で2組が聞く、次の時間は交代するというように役割をはっきり決めておくことで、発表する側も聞く側も集中して取り組むことができた。
- (エ)質を高めるためには、発表の人数や時間とかを工夫することも必要ではないかな。パソコンを活用して、発表資料をネットワーク上で自由に閲覧しながら、感想等をメールで送るといった形式をとって、送られてきた内容を貼り付けて相互評価とし、それをもとに自己評価を加えさせてまとめていくこともできる。
- (オ)友達を書いた付箋紙の内容から相手の意図をくみ取り、どういうことを直せばよいのか再度ワークシートに自分の言葉で書かせるという2段階の

取り組みを行った。

(カ)「よかったところ」「直したらよいところ」「質問」などを色のついた付箋に書いて、発表の模造紙に貼らせるようにした。そしてグループごとに付箋に書かれた内容を同じものはまとめて、直せることは改善し、質問に対しては答えられるように新たに調べ直すなどの取り組みを行った。

このように、ほぼ評価し合う視点やねらいを子どもたちにもたせて取り組むことの必要性が明らかになってきました。それで、いつ、どのようにして視点やねらいをもたせるとよいのかを考えるために、

【補充発問3】を投げかけました。

【補助発問3】評価の視点を子どもに伝えるのはどの段階で、どのような方法で行うのがよいのでしょうか。

- (イ)中間発表会になってからでは遅いのではないかな。まとめていく段階では評価の視点を意識しておく必要がある。
- (ウ)早い段階で「相手意識をもって自分の言葉で発表できたか」などの観点を決め、中間発表会をしようと呼びかけた。
- (ウ)テーマ設定の時点でねらいがある。ということは評価もあります。それが子どもの学習状況によって毎時間毎時間変わっていく。ねらいは最初からずっと意図的にもっておかなければならない。
- (エ)中間発表会で、今日はどこを見るのかということをしつかりと子どもに与えていくことが大切である。

要するに、【設問3】をめぐる討論では、次のような共通理解をすることができたように思います。

- ①早い段階で、評価し合う視点やねらいを子どもたちにしっかりもたせて取り組むことが必要である。
- ②本発表の場面を工夫することで、相手を意識した中間発表会となる。
- ③中間発表会の形態を工夫する。
(ワークショップ形式、付箋の活用、メールによる相互評価等)
- ④他者評価を受けて、自己評価を充実させる。
- ⑤教師自身が見通しをもち、中間発表後の新たな問いかけを行うことも大切である。

以上がケース「学びが質的に高まらない総合的な学習」を使った全体討論のあらましですが、その後全教員向けに感想を自由記述で求めました。それらの感想は、1)年間指導計画、2)課題のもたせ方、3)中間発表会、4)学校・教員の取り組み、に分かれて記されていました。それらをすべて列挙しておく、次のようになります。

a. 年間指導計画

- (ア) いままでの総合は必ずしも悪いものではなく、評価できると思います。児童の発表などは、いまひとつだったかも知れませんが、体験したことの意味は大きいです。どの子も同じではない。一律に評価できませんが、総合のよさと思うので、あまり評価・評価と言わなくてもよいのではないでしょうか。よいところを認め、今後に生かせたらいいと、幅広く児童を見ていきたいと思います。
- (イ) 新しく課題として取り組んでいかななくてはならないことが増えてきたのでよかったです。ただすべてを十分に生かすことはむずかしいので、特にどこを重点課題として取り組むか、絞るべきだと思いました。
- (ウ) 表現力は、国語のねらいとからみ合わせて、低、中、高学年の段階を考えていきたいです。
- (エ) テーマ→身につけたい力→それを具現化したものを考えて、子どもたちへの指導へ生かしたいです。
- (オ) 総合的な学習の時間の本年度の指導計画が明確になってきた気がします。子どもの実態に応じ、系統づけて計画するのは大変な作業だと思いますが、積み重ねると大きな財産になるので、各学年で話し合って考えていきたいです。
- (カ) 今後の課題も見えてきて、方向づけができたと思いました。しかし、実際にむずかしい問題が多いので、みなでよく話し合い、本校としてのものをつくっていききたいです。
- (キ) 総合的な学習の方向性が少し見えてきました。
- (ク) 本校の年間指導計画を早急に立てなければと思いました。
- (ケ) カリキュラムを具体化する必要性や方法が共有できたことが大きいです。具体化に向けた動きをどんどん進めてほしいです。

b. 課題のもたせ方

- (イ) 導入が大切です。
- (ウ) 導入をどのように工夫して題材と子どもたちを出合わせるかが大切であると思いました。

c. 中間発表会

- (イ) 中間発表会后、新しい課題をもたせるための支援・助言が必要です。
- (ウ) アウトプットのためにはインプットが必要です。

d. 学校・教員の取り組み

- (イ) 総合での他学年の実践における工夫が聞けて、とてもよかったです。今回の研修で学んだことを、これからの学習に生かしていきたいです。
- (ウ) 教師の力量を高めないといけないと思いました。
- (エ) さまざまな人の意見を聞いたり出したりすることにより、設問の答えが見えかけたような気がします。

(フ) 教材研究の大切さをあらためて感じた。

(ク) 他の学年の取組みもわかり、今後に生かせると思いました。

このように南大津小学校に特有な問題として総合的な学習の全校的なカリキュラム編成について、ケースメソッドを使って話し合った結果、事前に参考資料として、先進校の研究紀要からの抜粋したものを配布したおかげで、話し合いが焦点化でき、明確な目標（子どもに身につけたい力）をもって、指導を積み重ねていくことの重要性を全員が再確認し、系統的な年間指導計画のイメージが具体的になったように思います。

ただし、ケースの【設問1】と【設問2】については、今回の討論のやりとりに対する結果を振り返り、安藤先生の指導助言も受けて、よりの確な討論になるように、次のような修正（下線で示す）を行って、ケースを手直ししました。

【設問1】本校の課題である“育てたい力”を横軸に、“子どもの興味関心”を縦軸にして、総合的な学習の年間指導計画をつくりなさい。

【設問2】教師が設定した課題を子どもにとって切実な問題に転化させるには、どのような点に留意する必要がありますか。箇条書きであげなさい。

ケースの文章も4カ所、全部で3行程度の修正をしました。このように、ケースは実践にかけてみて、たえず修正しなければならないものです。

なお、2008年3月に、本校の総合的な学習のテーマを「ふるさとに学び生きる」として、3学年「作って食べよう」、4学年「生活を見直そう」、5学年「地域に生きる」、6学年、「ともに生きる社会をめざして」という学年テーマにして、それぞれにつけたい力を明示した学校カリキュラムを策定して、2008年度から実施中です